授業者に訊く［特別版］

中国と韓国の音楽教育

～横浜山手中華学校と東京韓国学校を訪ねて

ヴァンVol.20という節目を迎えたこともあり、今回の「授業者に訊く」では
外国での取り組みに目を向けてみたいと考え、横浜山手中華学校と東京韓国学校を訪問しました。
参観したそれぞれの授業の教材は、日本の教科書にも掲載されている
『草原情歌』（中国青海地方民謡）と『アリラン』（朝鮮半島民謡）です。
「伝統音楽の指導」について各国で意見を交換するための、またとない機会となりました。
両校を訪ねたのは、静岡県立小笠高等学校教諭の河合紳和先生。
参観後、日を改めて、中華学校の羅 順英先生と韓国学校の裵 恩卿先生との鼎談を開催しました。
紙面の前半に各学校の授業レポートを、後半には日本・中国・韓国の先生方による鼎談を掲載しています。

授業レポート：**河合紳和**

静岡県立小笠高等学校教諭

❶ 横浜山手中華学校　授業者：羅 順英（ラ・ジュンエイ）

はじめに

横浜山手中華学校は小学部・中学部で構成され、児童生徒の多くは両親あるいは祖父母の代に中国から日本に移り住んだ、いわゆる華僑の方々の子孫である。したがって、卒業後はほとんどが県内や東京の公私立の高等学校に進学する。学校は自主運営の形態をとり、中国本国の監督下には置かれていないため、独自の教育方針に基づく学校運営がなされている。したがって、教科書についても、日本で使用されているものを用いているが、音楽を含む中国の伝統文化の指導については、学校独自で作成した教科書を用いているとのことである。

バイリンガル教育を根幹に

教育の根幹理念の一つに、日本語と中国語によるバイリンガル教育を掲げており、生徒たちはこの両国語をそれぞれの場面で使い分けながら学校生活を送っている。今回参観させていただいたのは、主に中学部の授業を担当されている羅 順英先生の中学部１年生の授業で、45分間の授業のうち、中心となる８割の部分が中国語で進められ、残りの２割に日本語が織り交ぜられていた。

リコーダーからの導入

授業は昼休み、清掃後の５時限目。始業の挨拶は中国語で行われた。私自身の授業も含め、今までに参観させていただいた授業は、活発な授業の雰囲気づくりのために歌唱からスタートするものが多かったが、羅先生の授業はリコーダーからのスタートだった。これは、音楽室に移動してきた生徒たちの「気持ち」と「呼吸」を整えるのに、歌よりもリコーダーのほうが効果的だと考えたことによるのだそうだ。生徒たちは教科書に掲載された『少年時代』をアルト・リコーダーで演奏する。運指の不正確な生徒のところへこまめに巡回する羅先生、その一方で、他の生

徒たちも自主的に周囲でサポートし合っていた。座席は自由。音楽の不得意な生徒が教室の後方部に固まってしまわないのかと問うと、むしろその逆で、授業に遅れたら大変なので、不得意な生徒は率先して音楽の得意な生徒の近くに座ろうとするとのことだった。

生徒たちに人気の『マイ バラード』

15分間のリコーダー練習後、生徒たちは『マイ バラード』を合唱した。日本の中学校で歌われている定番中の定番ともいえる合唱曲である。彼らは日本の合唱曲が大好きなのだそうだ。ここでも、羅先生は音程のおぼつかない男子生徒をリーダー格の生徒の横へと移動させ、互いにサポートし合う環境をつくっていた。横浜山手中華学校では、日本の中学校で盛んな合唱コンクールのような行事はないものの、クラス合唱やクラス合奏を盛んに行い、学校生活のさまざまな場面で発表させているという。『マイ バラード』はそんな取り組みから生まれたハーモニーなのだそうだ。

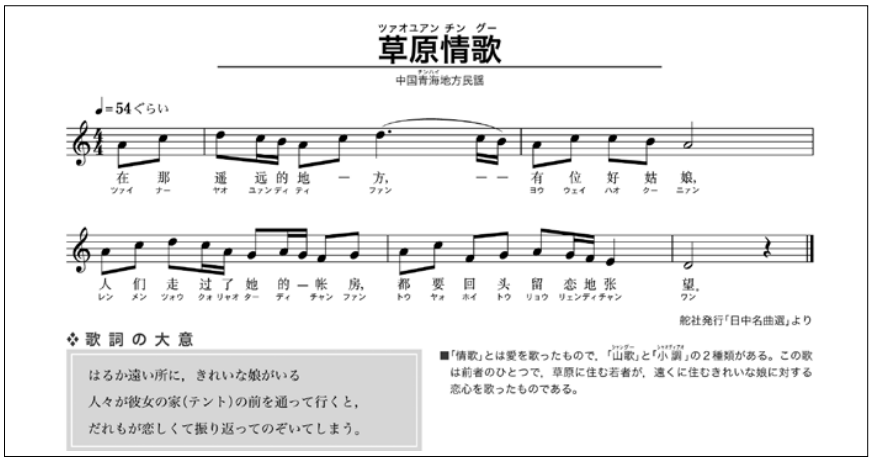
中国伝統の『草原情歌』

そして、いよいよ本時の中心となる『草原情歌』へと入っていく。羅先生から生徒たちに２種類の楽譜が配布された。１つは日本でよく知られている『草原情歌』の楽譜、もう１つはその原曲ともいうべき中国青海地方民謡『在那遥远的地方』の楽譜である。ちなみにこの２曲は、日本の音楽の教科書には共に『草原情歌』として掲載されている。『在那～』は青海地方で歌われていた民謡を、民謡収集家の王洛賓が採譜し、中国語歌詞を付けたものである。この曲が昭和20年代の終わり頃に日本へ伝わり、劉 俊南によって日本語の歌詞が付けられた。その後日本人が歌いやすいようにメロディーも編曲された。これが、今日私たちがよく耳にする『草原情歌』である。やがて、当時の「歌声喫茶」で愛唱されるようになり、それが中国へ「逆輸入」の形で伝えられたとのことである。

授業では、まず王 洛賓の紹介と曲についての解説をプリント（いずれも中国語で書かれたものだった）によって行ったあと、生徒に『在那～』の中国語歌詞（１番と２番）を音読させ、それから羅先生が１小節ずつ範唱し音取りをさせた。同様に『草原情歌』についても音取りをさせ、２つの曲の共通点と相違点について生徒に発言させた。挙手することなく、生徒たちから思い思いの意見が飛び出してくる。羅先生はそれらを丁寧に受け止め、時には補足の説明を加えたり、一歩踏み込んだ問いかけをしたりして、生徒の発言を促していた。

イメージを掘り下げる

続いて、２つの曲の参考演奏を鑑賞し、それぞれの演奏から受けた印象や、それによって描いたイメージについて発表させた。「夕暮れ」「砂漠」「港」「田舎」など生徒たちのイメージはさまざまだが、意外にも「草原」という言葉は出てこなかった。また、日本で知られている『草原情歌』のほうが「暗い」



現在、高校1年生の教科書に掲載されている『在那遥远的地方』ヴァージョンの『草原情歌』。

ZAI NA YAO YUAN DE DI FANG　Words & Music by Wang Luobin　© Copyright by Sony/ATV Music Publishing (Beijing) Co., Ltd.
The rights for Japan licensed to Sony Music Publishing (Japan) Inc.

という感想もあった。『在那〜』に比べて短調の色合いが濃いことを感受したのだろう。生徒が発言する間、羅先生はいっさい板書をしない。板書によって言語活動の流れを遮らないための配慮なのだろうと思った。羅先生は「どの作品でも、背景にあるイメージを大切にして歌わせたい」と言い、たとえ短い時間でも鑑賞活動を取り入れているとのことである。『草原情歌』は中国民謡であるが、広大な中国は地方によってそれぞれ風土も異なり、ひと言で「中国民謡」といっても、その情趣はさまざまである。また、中国に行ったことのない生徒も少なくないため、作品のイメージづくりは決しておろそかにできないとのことである。

45分間の授業はとても短く感じた。さまざまな学習活動をバランスよく配置し、生徒の集中力をとぎれさせないように工夫されていたからだろう。日本の学校の授業に近いという印象も受けた。２か国語で行う…という点を除いては。

Information

横浜山手中華学校
〒231-0024　横浜市中区吉浜町2-66
[URL]
http://www.yokohamayamate-chineseschool.ed.jp/

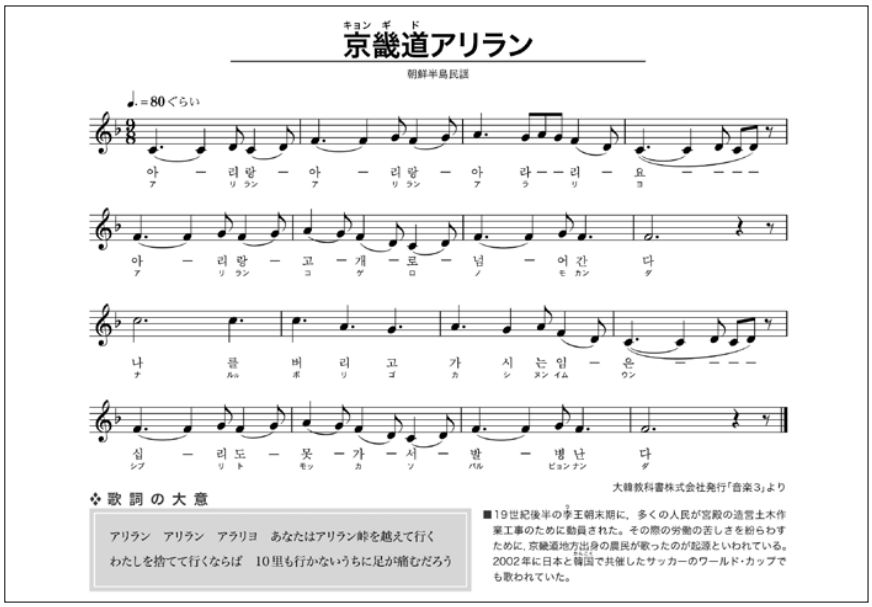
❷ 東京韓国学校　授業者：裵 恩卿（ベー・ウンキョン）

はじめに

東京韓国学校は初等部・中等部・高等部で構成され、横浜山手中華学校とは対照的に、親の転勤で一時的に在日している児童生徒が多いことから、教育は基本的に本国のカリキュラムで行われている。したがって授業は韓国語で行われ、教科書についても本国で使用されているものを採用している。今回参観させていただいたのは、裵 恩卿先生による中等部・高等部の合唱の選択授業である。東京韓国学校では、放課後に生徒たちが学習塾に通わなくても済むようにと、正規の時間割の授業とは別にさまざまな教科科目の補習授業を開講している（このような手厚い措置は、本国ではごく一般的とのこと）。その他にも楽器や合唱といった各個人の特技を伸ばすための課外授業が週に２時間実施され、中等部２年から高等部２年までの生徒20名余りが参加している。

長大な『アリラン・メドレー』

授業は、朝鮮半島各地に存在するさまざまな『アリラン』をメドレーにした『アリラン・メドレー』の合唱から始まった。朝鮮半島には『京畿道（キョンギド）アリラン』『珍島（チンド）アリラン』『密陽（ミリャン）アリラン』など、地方によって歌詞やメロディーが異なるいくつもの『アリラン』が存在することはよく知られている。裵先生によれば、同じ地方の中でも町や村によって、また家庭によっても違うことがあるという。日本でよく知られるアリランは「京畿道地方」の旋律だそうだ。この『アリラン・メドレー』は、昨年９月に行われた日韓交流イベントで生徒たちが演奏した作品で、今回参観授業のために久しぶりに合唱してくれたようである。選択授業という性格上、合唱に対して意欲的な生徒が集まっているせいか、あるいは長い間じっくり歌い込んだ作品であったためか、生徒たちはとてものびのびと声を出していた。また、曲中にあるソプラノのソロも、美しい響きのある声で朗々と歌われていた。東京韓国学校は音楽行事を大切にしており、２年に１回、全校の音楽発表会を開催しているそうである。そこでは、音楽大学への進学を志す生徒などをはじめとするオーディションを通過した生徒のソロ、全学年の合唱や合奏、吹奏楽の演奏などが行われる。もちろん、この合唱クラスにも演奏の場が与えられる。



現在、高校1年生の教科書に掲載されている楽譜

チャングのリズムにのせて

ひととおり合唱したあと、裵先生が『アリラン』の歴史や種類について説明した。そして、日本の音楽の教科書に掲載されている『アリラン』（『京畿道アリラン』）の楽譜を配布し、生徒たちに韓国語と日本語で歌わせた。日本語の歌詞がメロディーにうまくなじまないのか、生徒たちは歌詞割りに苦労しているようにも見えた。裵先生は、『アリラン』が地方によって異なるものの、４分の３拍子（８分の９拍子）という共通の特徴をもっており、それが韓国の民族打楽器チャングのリズムに起因していることを説明し、実際にチャングを使ってそのリズムを演奏して見せた。その後生徒から３人を順に指名し、同じリズムを演奏させた。指名された男子生徒も決して恥ずかしがらず、積極的に前に出て演奏していて、その姿はたいへんほほえましく感じた。生徒がたたくチャングのリズムにのせて『アリラン』を歌わせると、裵先生はチャングのリズムを４拍子に変化させ、その場で生徒にたたかせた。さらにピアノ伴奏の生徒も即興で加わり、再び４拍子バージョンの『アリラン』を歌わせた。2002年のサッカー・ワールドカップで韓国の応援団が歌っていた『アリラン』である。

チャング（杖鼓、教科書では「チャンゴ」）P.15参照

あとから聞いた話だが、韓国では伝統楽器タンソ（短簫、日本の尺八と同類の楽器。P.15参照）を全生徒が学習するそうである。また、ほとんどの生徒がピアノの学習歴をもっているという。日本で盛んな吹奏楽は、韓国ではさほど普及しておらず、ピアノとは別にフルートやヴァイオリンなどを習っている子どもがかなり多いという。こうした楽器の指導については、学校が放課後の課外授業の一貫として個人指導を行っているとのことだ。

意欲にあふれる生徒たち

授業に臨む生徒たちの集中力はきわめて高い。これは、合唱の授業に限らず、一般の音楽の授業でも同じだという。生徒の目は常に裵先生に向けられている。日本の学校でしばしば見られるように、先生が大声でクラスに指示を与えることはない。裵先生は、説明のときも活動を指示する際も、常に落ち着いたトーンで生徒たちに語りかける。「合唱」の授業であるため、生徒の意見や発表を求める場面はなかったが、練習を重ねるごとに歌声に変化がみられたのは、生徒たちが裵先生の説明から何らかのインスピレーションを受けていたことを物語っている。何よりも、歌っているときの生徒たちの表情がとてもいきいきとしていたのが印象的だった。

Information

東京韓国学校
〒162-0056　新宿区若松町2-1
[URL] http://www.tokos.ed.jp/

2つの授業を参観して

正直なところ「肩透かし」を食った感がある。というのは、両国とも日本以上に民族意識が高く、国家や国民性に誇りをもっている国だけに、自国の民謡や伝統音楽の指導にも相当の「情熱」を注いでいるだろうという印象を抱いていたからだ。お二人の先生方は、ごく自然にそれらと生徒とを向き合わせていた。「民謡よりポップス」という嗜好は、日本の若者でも外国の若者でも同じである。私たちは「何を教材に用いれば生徒が意欲的に取り組むか」と頭を悩ませることが多く、その結果「民謡は真っ先に除外」されてしまう。大切なのは「歌うことが好き」「聴くことが楽しい」という心を育てることであって、それに成功すれば生徒たちはたとえどんな教材であっても目を輝かせるのである。

日本・中国・韓国の教師による座談会

中国・韓国の音楽教育の実践を訊く

横浜山手中華学校と東京韓国学校の参観を終えて

河合紳和
静岡県立小笠高等学校教諭

羅 順英 ラ・ジュンエイ
横浜山手中華学校教諭

裵 恩卿 ベー・ウンキョン
東京韓国学校教諭

伝統音楽の取扱い

河合：先日参観させていただいたお二人の授業では、『草原情歌』と『アリラン』という、それぞれのお国を代表する歌を教材にしておられました。日本の学習指導要領でも前回あたりから、「日本の伝統音楽の指導」ということが強くうたわれ始め、音楽の先生が箏や三味線を習いに行く、といった状況がみられました。そこで、「学校の音楽教育で伝統音楽をどのように扱うか」という点から話を始めたいと思います。まず、教科書の記述的な面はいかがですか？

羅：中国の教科書を見ても、伝統音楽の記述はわずかです。有名な民謡を扱ったり、中国の楽器を取り上げたりという程度の内容ではないでしょうか。横浜山手中華学校では、中国の文化になるべく多く触れさせたい、ということが第一にあるのですが、私もやはり西洋音楽で育っているので、指導といっても鑑賞が中心になってしまいますね。

裵：韓国の教科書では、４～５年前まで普通の歌曲や世界の歌の割合を７とすると、残る３が韓国の伝統音楽でした。それが最近になって、伝統音楽の割合が４ぐらいに増えてきました。子どもたちも私たち教員も、それで少しとまどっています。

河合：なるほど。伝統音楽の扱い方はどのようにされていますか？

羅：最近では中国の演奏家もだいぶ来日することが増えて、そういう方々をお呼びして小さな鑑賞会や、授業の１時間という枠を使ったワークショップなど、実際に見て触れる活動を始めています。

裵：韓国の音楽教育で伝統音楽というと、歌よりも楽器やリズムに力を入れているように感じます。小・中学校では、タンソという楽器を必ず学習します。これは日本のリコーダーのような感覚で、実技の試験にも使います。また、チャンゴを扱うこともあります。

河合：教科書は、それぞれの国のものを使用されているのですか？

羅：中学部は日本の教科書だけですが、小学部は本校で独自に作成したものと２種類使っています。

裵：東京韓国学校では民族教育を第一に掲げていますので、教科書も韓国のものと、日本のものとの２種類を使っています。45分間の授業のうち、約30分を韓国の教科書で歌い、15分は日本の教科書で日本の歌を歌うような感じです。

発声と言語

河合：伝統音楽について、発声指導という面からはいかがでしょうか？先日の参観の際、羅先生は日本の歌を歌うとき、「喉に負担がかかる」とおっしゃっていましたし、裵先生からも、「民謡を歌う声はベル・カントとまったく違う」とお聞きしました。実は日本の学習指導要領には「曲種に応じた発声」という記述があり――これが教員を苦しめているのですが（笑）。いわゆる中国や韓国の民謡を歌う発声の指導はなさっていますか？

羅：民謡の発声は自分ができないので、していません。

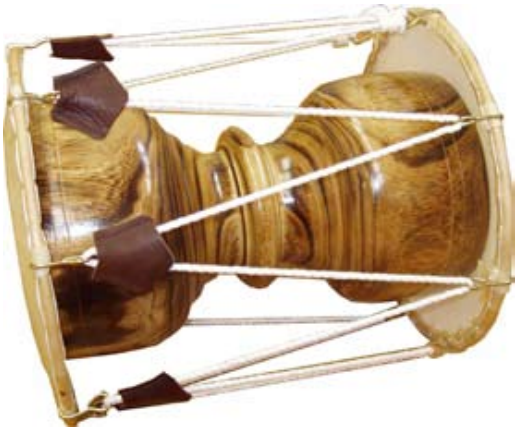
裵：なるべく韓国の発声に近いもので歌うようにしていますが、子どもたちがあまり理解できていないようなので、鑑賞資料を使うこともあります。

河合：発声指導は…？

裵：私は大学で声楽を勉強したので、普通に歌うときは西洋の発声です。羅先生の専門は何ですか？

羅：私も歌です。中国では民族唱法と

タンソ（短簫）
©韓国伝統楽器店BBD



チャング（杖鼓）

●ラ・ジュンエイ
横浜山手中華学校教諭

区別して、いわゆるベル・カントを「美声唱法」と呼び、それによって大学の専攻も分かれているほどまったく別の扱いです。ですから、民謡の授業で「ではそれをまねて歌いなさい」という指示は出したことがありません。できないことを子どもに教えるのはどうかなと思うのです。もちろん聴かせることはありますが…。それよりも、楽しく明るく歌って、「こういう曲があるんだ」と知ってくれたほうがいいのかな、と思います。

河合：伝統の発声法といっても、中国の場合、一つではないですよね？

羅：民族によっていろいろ違うと思います。

河合：裵先生も、『アリラン』が各地で違うものだとおっしゃっていましたが、発声法も同じように…？

裵：韓国の伝統的な発声法は丹田*（注）に意識を集中して押し上げるようにして声を出す「陽声」と「陰声」の2種類があります。そして「東便制」と「西便制」というように、地域によって発声方法が異なります。子どもたちには、いろいろな韓国の歌い方を聴かせています。韓国の歌の伝統的な発声は喉からなんですよ。

河合：無理に声を出そうとすると、喉を痛めませんか？

裵：韓国で最も理想的な発声法は少しハスキーな声だと言われています。声楽を学んだ私としてはその理想とされる発声法については疑問を感じますが。

河合：日本の民謡などの伝統音楽と同じですね。

裵：日本の伝統民謡について詳しくは存じませんが、どこの国でも伝統を守ることは簡単なことではないと思います。

河合：両方の発声をするというのは難しいのでしょうね。羅先生は中国語で話したり歌ったりするほうが喉に負担がかからないとおっしゃっていましたが…。

羅：たぶん中国語自体が、喉に負担のかからない発音だと思うんです。日本語を使うとどうしても喉を使ってしまいます。声楽家の場合はふだんから意識的にベル・カントの発声をするのかもしれませんが、私は小学部低学年の子どもたちとの関わりも多いので、実際そんなふうにはしゃべっていられません。

裵：私は逆です。日本語を発音するのは、本当に楽です。日本語は鼻や頬骨の辺りで響かせますが、韓国語はほんとうに喉から声を出します。だから「静かにして！」と子どもたちに言うときも、韓国語だと喉にきてしまいます。

河合：羅先生の場合、日本でお生まれになっていることと関係があるのではないですか？裵先生は大人になってから日本語を学び、外国語として日本語を話すので、喉を使わないのかもしれないですね。

●ベー・ウンキョン
東京韓国学校教諭

（注）へその少し下のところで、下腹の内部にあり、気力が集まるとされる所。

羅：私にとって中国語は外国語なので（笑）中国語を話すときは、かえって意識しているのかもしれないですね。

活発な教員研修

河合：韓国では、伝統音楽に対する教員研修がかなり充実していると伺いました。

裵：義務付けられているものではありませんが、もし私が韓国の伝統音楽を授業のために習いたいと思ったら、１年間で90時間申請して受けることができます。インターネットでの研修も発達しており、学校の空き時間で自由に研修を受けることが可能です。受講後、簡単な試験があり、それに合格すると修了証書のようなものがもらえます。修了証書と請求書を学校に出すと、受講料は学校から戻ってきます。

河合：実質無償なのですね。

裵：子どもたちを教育する教員は、きちんとした内容を教えるべきです。だからだと思っています。

河合：中国での教員研修は…？

羅：私たちの場合、夏休みなどで研修に行かせていただく年がありますが、基本的には華僑の管轄の部と連絡を取って研修を行っております。「音楽を勉強したい」「美術を勉強したい」という教員がいれば、講師を呼んでいただきます。私も２回研修に行きました。１回目は中国の曲について学び、２回目は中国の音楽史を勉強しましたが、２回とも１対１で講師の方に教えていただきました。

学校音楽の実際

河合：音楽科の時間数は、どのくらいですか？

裵：本校の場合、中等部が１週間に1時間、高等部も１時間ぐらいですが、校長先生やその学校によって、中学校でも１時間～2時間の学校があります。やはり以前よりは減っていますね。

羅：中華学校では今、小学部の４年生までは２時間、５年生以上は１時間、中学部も１時間です。

河合：羅先生は小・中で教えていらっしゃるのですか？

羅：音楽は中学部だけです。小学部では別の課目を教えています。

河合：裵先生は？

裵：初・中・高で教えています。

河合：１週間に何時間授業をされていますか？

裵：選択も入れて全部で22時間です。それから高１の担任をしています。

河合：22時間の授業と担任もされているのですね。ところで、日本語の授業はそれぞれの学校であるのでしょうか？

裵：週４時間あります。

羅：同じです。うちも４時間です。

裵：英語は８時間です。それに加えて韓国語が中等部で８時間、高等部で８～10時間あります。

羅：初等部に入学する時点で、韓国語を話せないお子さんはどうしているのですか？

裵：授業の終了後に２時間、親たちがボランティアで週２、３回教えています。

羅：中華学校はゼロからのスタートなので、語学については全然違いますね。

裵：２週間に１回は土曜学校もあります。５歳から大人まで、初等部の校舎を借りて韓国語を勉強することができ、そこに高等部の生徒がボランティアで指導に入ることもあります。

●かわい・のぶかず
静岡県立小笠高等学校教諭

河合：校内合唱コンクールなどは実施されていますか？日本ではとても盛んですが…。

羅：中華学校ではありません。２年に１度大きな学芸会があるので、そこで合唱をしますけれど。

裵：韓国学校では２年前の音楽会で、合唱コンクールを取り入れ、学年ごとに優秀クラスを表彰しました。

河合：どんな曲を歌ったのですか？

裵：私が『MY SONG』の中から何曲か選んで歌ったときは、『手紙』が人気でしたね。日本の曲を1曲と、もう１曲は必ず韓国の曲を歌います。

羅：それは授業だけで練習するのですか？

裵：そうです。子どもたちは授業以外には時間がないのです。

河合：ブラスバンドや吹奏楽といっ

たクラブ活動はあるのですか？

裵：それが、あまりないのです。楽器を始めるとしたら、個人で、専門的に習わせます。そして、その子が本当に上手なら、アメリカやヨーロッパの音楽学校に行くよう勧めます。

羅：中国でも少ないと思います。だから、中国から来た生徒たちは日本の学校でクラブ活動を真剣にやっていることが信じられないようです。中国から来た先生も、いわゆる社会教育的にサッカーや野球を真剣にやっていることを不思議に感じているようでした。これは日本の伝統だと言っても、なかなか理解してくれません。（学校単位ではなく、学校外でのクラブは多くある。）

河合：そうなんですか！親からの要請は非常に多いのですよ。部活で子どもたちを縛ってくれ、土日を休みにしないでくれと。共働きで家に誰もいないので、学校で部活をしているほうがいいというのです。

ポップス好きな子どもたち

河合：中国や韓国の子どもたちは、日本のどういった歌が好きですか？

裵：日本の教科書を使って感動したのは、最新のJ-POPなども入っていることです。授業で子どもたちが日本の歌を楽しく歌っているのがいいなと思いました。韓国の教科書にポップスは入っていないので、子どもたちはつまらないと言います。

羅：私は特に中国の音楽に触れさせたい、今の中国の音楽事情を知ってほしいと思い、中国で流行している曲や古くから歌われているポップスなどを紹介しています。また、森山直太朗の『さくら（独唱）』や喜納昌吉の『花』なども、中国では有名な歌手によって歌われているので、それを２か国語で歌わせます。

河合：日本の教科書にJ-POPを取り入れているのは、必要だからというか、「音楽の授業で子どもたちに声を出させるためには唱歌よりもJ-POPかな」という、すがる思いからかもしれません。

裵：日本の曲の中では、子どもたちは『ソーラン節』がほんとうに好きです。『涙そうそう』や『上を向いて歩こう』なども…。

羅：歌いやすいんですよね。

評価の方法

河合：ところで、評価についてはどのような形で行っていらっしゃいますか？

羅：中華学校では、歌とリコーダーが

基本なので、両方とも100点満点で評価し、割って平均点を出します。小学部から中間・期末試験があるのですが、技能教科は期末だけなので、その学期内に小さなテストをします。小学部ではドレミの階名を書くといったテストを何回か行ったり、鑑賞の授業のワークシートなどから平均点を出します。それとは別に学習評価として、例えばリコーダーだったら、運指はできていたか、タンギングはできていたかなどをＡＢＣで評価します。

裵：韓国学校では、100点満点のうち70点が実技、20点が音楽感想文――音楽感想文は、学校で聴いたものでもいいし、実際にコンサートなどに行き、パンフレットや写真を添付するのもよしとします。あとの10点は授業態度です。実技試験は１学期は歌、２学期は楽器、３学期は自由楽器でのアンサンブルです。

河合：評価は数字で出すのですか？

裵：数字です。私の場合は、70点を20点＋20点＋30点にして、その中をさらに４つの段階に分け、音程やリズムなどを詳しく評価していきます。20点の場合は、18点、16点…と２点差にして、30点の場合は3点差にします。

河合：生徒にはどこまで伝わるのでしょうか？

裵：受け持っている400人一人一人のテスト用紙に、実技も全部チェックして示します。逆にそのほうがいいんです。子どもたちは大学に自分の点数を持って行くので、点数に敏感ですし、実技試験は親からの関心も高いのです。「うちの子のどこが間違っているんですか？」と聞いてくるお母さんもいますので。そういうときの説得力になりますから。

河合：大学進学に、音楽の成績も関係あるのですか？

裵：全教科なので、すべての成績が大学入試につながります。

羅：中国国内でも最近は主要教科の勉強しかさせないという雰囲気があるようです。99点ではだめだと。教科書が多いので、上海の小学生はキャリーバッグを引いて登校しているそうです。

音楽科の位置付け

河合：例えば北京や上海の一部の学校ではとても進んだ音楽教育をしているけれど、まったく音楽教育を行わない地域もあると聞きます。

羅：聞きますね。残念な話ですけれど、それよりも勉強に時間を費やしましょうという動きです。

河合：中華学校の中で、「音楽は削ります」などという動きはありませんか？

羅：まったくありません。特に高校受験を控えて授業がきつくなると、中学部の生徒は音楽の授業でいきいきと活動しているようです。行事の都合で音楽の時間がつぶれても、学校はきちんと補填してくれますし。

裵：韓国学校も音楽教育については同じです。教育熱心なものですから音楽の選択授業以外にも、子どもたちは何かしらの楽器を必ず習っているほどです。ピアノは小さい頃からほぼ全員――80～90％は習っていますし、加えてヴァイオリンやクラリネットなどを個人で受講料を支払って習っています。初等部と中等部には特別授業があり、子どもたちは専門の先生によるグループレッスンを受けられるようになっています。

河合：授業ではリコーダーや鍵盤ハーモニカも学習するそうですから、皆が１つ以上の楽器を扱えるのですね。中国や韓国の意欲的な取り組みにはとても刺激を受けました！

特集 高等学校におけ

今回は、高等学校で音楽に関係する
部活動の顧問をされていらっしゃる先生方に、
実践と指導の工夫をお訊きしました。
技術指導はもちろんのこと、基礎・基本の大切さ、
生活態度の改善、コミュニケーションのとり方、
音楽と身体性、心の育成、地域との交流…。
ときに立ち止まったり、不安を感じたりしながらも、
生徒とともに挑戦する中で見えてくるものとは――？
「本番でよいパフォーマンスをすること」だけではない、
ふだんからの積み重ねについて、
5人の先生方がお話ししてくださいました。

る部活動と音楽

❶ 吹奏楽部

❷ 吹奏楽部（ビッグ・バンド）

❸ 吹奏楽部（マーチング・バンド）

❹ ダンス部

❺ 音楽に関する部活動を
数多く実践している学校

1 吹奏楽部

部員数が少なく、停滞している吹奏楽部を変革していくには？
週3日という限られた日数をポジティブに活用するには？
――女子校から共学校への変革に対応しながら、
吹奏楽部を指導することとなった広尾学園 中学校・高等学校の宮内寛之先生。
どのようにして部員と歩んでこられたのか、お話を伺いました。

広尾学園中学校・高等学校教諭
宮内寛之（みやうち・ひろゆき）

●最初は吹奏楽部の指導を固辞されたそうですね。

本校に勤務する以前、バンドディレクターやインストラクターとして、いくつかの学校で生徒たちを指導したことがありました。そのときに、生徒たちが音楽を「やらされている」という印象を強くもちました。サウンドは鳴っていても、顔は無表情、まるでお人形たちの集団のようではないかと。コンクールの成績も大事ですが、部活動では音楽を楽しむことや、仲間との関係も大切です。そうしたことを忘れず、愛されるバンドとなるには、学園からの支援やたくさんの方々の助けが必要になります。ですので、時期だと思えるときが来るまでは、部活指導の依頼を断っていました。

●創部時代に取り組まれたことは？

吹奏楽部の顧問となり活動の様子を見て私がまず感じたのは、生徒の生活態度を変えなければいけない、ということでした。規律を守る、物事に取り組む姿勢といった面について、とにかくたたき直そうと。また逆に、生徒たちが何を考え、どう感じているのかについてもできるだけ知ろうと努めました。部員が多くなかったので、生徒一人一人と交換日記をするなどしてコミュニケーションを図りました。

●楽器の指導については、どのように取り組まれたのでしょうか？

「もっとうまくなりたい」という気持ちを育てることが、とても大切だと思います。顧問になった当初、生徒たちに演奏するための基礎が足りていな

基礎・基本は「意欲」だと思っています。

いことを率直に伝えました。「君たちの状況はこうなんだよ」と、かなり厳しい指摘をしたと思います。そして「技術を教え、実践させ、ほめる」――この繰り返しを始めました。

しかし、やはり生徒の心も育てていきたいという気持ちが強く、ついつい生活面などの指導にエネルギーを使ってしまいます。ひょっとすると、楽器の演奏技術よりも道徳的なことのほうに力を入れているのかもしれません。

●週３日の活動から見えたことは？

活動日数のことは苦しい問題でした。朝練や自主練を課しましたが、筋力をつけるには時間がかかります。また、生徒どうしの会話が少なくなり、コミュニケーション不足から部の雰囲気が悪くなりかけたこともありました。そのとき、生徒が自主的にレクリエーションの要素を活動に取り入れ、上手にコミュニケーションをとり始めたのです。これには感心しました。活動の目標や内容を共有することは、部活にとってとても重要ですね。

●部活から見える基礎・基本とは？

中学や高校の部活について大きく捉えるならば、基礎・基本は「意欲」だと思っています。とにかく意欲を育てることが重要です。生徒を見て感じるのは、「これがしたい！」という欲求の欠落。豊かな時代に育っているせいなのでしょうか…。

●ハーモニーディレクターは使われないそうですね。

音楽的なことで大切にしているのは「聴いて感じること」と「呼吸」です。そのため生徒には「音を外してもいいから、とにかく音を出しなさい」と指導していますし、「呼吸」についての勉強会も定期的に開いています。また、「不健康な音を出すこと」と「リズムを感じさせてもらう」癖をつけたくないので、ハーモニーディレクターは使用しません。

●教師への道を決意するに当たり大きな転換期があったとのことですが…。

大学時代の私は、エキストラでプロのオーケストラに交じって出演する機会に恵まれていたため、「大学の先生に教わるよりも…」という意識をもっていました。しかし、お金のためにホルンを吹くようになってしまっている自分の姿にも思うところがあり…。もう一度学び直そうと、ドイツへ留学しました。

そこで直面したのは、徹底的なダメ出しです。師事したドイツ人の先生は、私の演奏を聴いただけですべてを理解したかのように、音楽家にとって大事なことは何かを教えてくださいました。その指導は情熱にあふれており、強烈な言葉や指導の裏側にある先生の責任感と深い愛情を感じることができました。そうした指導の中で、しだいに変わっていく自分を実感しました。同時に「教育」の尊さを学びました。そして、音楽を介して人を育てる教師になろうと決意して帰国したのです。

●部活をどのように位置付けていらっしゃいますか？

吹奏楽部を指導することがどれほど大変なことか、多くの先生方が知っています。私は、「スクールバンドであること」を強く意識しています。学校における、仲間たちとの活動なのです。みんなでぶつかり合って悩みながら音楽をつくっていく。そこを大事にしていきたいなと思います。

2 吹奏楽部（ビッグ・バンド）

**ジャズについての知識もないまま、
ある日突然ビッグ・バンドを指導することになってしまったら?
クラシック音楽づけで音楽大学に入学し、音楽科の教師になった山﨑栄一先生。
ビッグ・バンドやジャズなど、まったく未知の世界でした。
現在、生徒たちはいきいきと演奏を楽しみ、地域のジャズコンサートへの
出演も続けています。どのような実践の工夫をされているのか、お話を伺いました。**

神奈川県立金沢総合高等学校総括教諭
山﨑栄一（やまざき・えいいち）

●ビッグバンドの指導を始められたきっかけは？

15年ほど前、神奈川県立川崎高等学校に勤務していたときに、川崎市のクリスマス・ジャズコンサートへの出演依頼をいただいたことです。吹奏楽部の参加に加え、「曲をつくってください」という依頼でした。コンサートのトリを務めるのは、日本ジャズ界重鎮の前田憲男さん。お客さんはジャズを楽しみに演奏会にいらっしゃるわけですから、前座とはいえ大変なことでした。

●実際、どのように取り組まれたのですか？

心構えや知識を得るよりも先に、とりあえず飛び込んでしまったという感じです。オリジナルの作品づくりは大変な作業でした。自分の思いや生徒に体験してほしいことを織り込み、さらにジャズファンのお客さんを喜ばせようとジャズの要素も取り入れて…。そのときは、自作曲以外に『A列車で行こう』も演奏しました。見よう見まねの雰囲気で…。知らない強みというか、とにかく思い切ってトライしたのが、すべての始まりでした。

●初めてのジャズ体験の印象は？

クラシック音楽、それもバロックに熱を上げていた自分にとっては、とても新鮮でした。アドリブのソロ、オフビート…。クラシック音楽とは違い、演奏者の発想力や自由度が高いことにも感動しました。それで、ジャズコンサートへの出演をきっかけにして、ジャズに焦点を当てた吹奏楽部の指導を

生徒たちのセンスに感動し、共感する気持ちが生まれ、音楽観が変わりました。

始めました。

●どのようにジャズを勉強されたのですか？

自分自身がレッスンを受けたり、ジャズハーモニーを学んだりするのではなく、とにかくジャズのできる人にお願いして、指導に来ていただくことから始めました。プロの演奏は迫力があり、出てくる音も違います。いっしょに練習して雰囲気を感じたり、解説してもらったり…。本番でいっしょに演奏していただいたり、逆に部員を引き連れてプロのステージを聴きに行ったりして、生徒とともに刺激を受けました。

●アドリブの練習などは？

生徒にアドリブで演奏させるときに、正直いって自分で手本を示す自信がないこともあります。ですからここは開き直って、生徒を誘導して指導することに徹しています。

例えば、まずメロディーをそのまま吹かせます。次に「終わりの部分をちょっと変えてみてごらん」「こことここの音符の間に、何か入らないかな？」などと問いかけて、アドリブを引き出します。実際の音を聴きながら「ちょっと変じゃないかな」とか、よかったときには「いいね、ナイス！」と声をかけて、だんだんアドリブらしい音にしていくのです。

●「できないことは教えられない」ということではないのですね。

私が具体的にアドバイスをして、生徒が自分で考えて工夫をする。それを今度は評価する、という流れです。そうやって互いに成長していくことが大切だと思っています。

●それでも指導にはご苦労されることもあるのではないでしょうか？

最初は難しく考えずに、まねをすればいいんです。グレン・ミラーの曲を演奏する場合ならば、オリジナルのCDを何度も聴き、まずはあの独特なリズムの感じを生徒が自分の言葉のリズムで言えるようになることが大切です。「ドゥーバ ドゥバッ…」などと感覚的に…。楽譜からジャズ特有のニュアンスを読み取るのは難しいことです。また、ギターなどを担当する部員がいなければ、OBにどんどん頼んで、エキストラを務めてもらえばいいのです。

●授業でもジャズを活用されていらっしゃいますか？

「表現」、特に「創作」に生かしたいと考えています。リズムで重ねるアドリブ、ボディパーカッションやシンシュタインの『ロックトラップ』、音楽Ⅱでは循環コードを使った創作など。こうした授業では、吹奏楽部の生徒が核になってくれますが、授業を受ける生徒たちすべてのことを考えると、内容的に限界はありますね…。

●ビッグ・バンドの指導を通して感じていらっしゃることは？

教師になりたての頃は、生徒を、あるいは演奏を「型にはめよう」としていました。自分のほうに向けようとして…。だから生徒ともよくぶつかっていました。それがビッグ・バンドやジャズという未知の世界に出合ったことで、生徒たちといっしょに乗り越えられたのです。生徒たちのセンスに感動し、共感する気持ちが生まれ、音楽観が変わりました。また、地域との交流や連携といった実体験を通して、自分の幅も広がったのではないでしょうか。尻込みしないで、とにかく始めてみてよかったなと思っています。

3 吹奏楽部（マーチング・バンド）

マーチング・バンド全国大会において、現在7年連続で金賞受賞の栄誉を誇る、湘南台高校吹奏楽部「White Shooting Stars」。今では部員数が150名を超す大所帯のバンドですが、最初の一歩は12人からのスタートでした。指導に当たっておられる羽場弘之先生は、歴史を教えている社会科教諭。生徒がいきいきと主体的に活動するためには、指導者のどのような工夫があるのでしょうか？

神奈川県立湘南台高等学校教諭
羽場弘之（はば・ひろゆき）

●音楽専科ではないのに、吹奏楽部を指導されていらっしゃいますね。

私は歴史を教えていますので、大学は文学部出身です。高校でチューバ、大学でユーフォニアムと学生指揮をしていた吹奏楽部の経験が、音楽に深く関わるきっかけとなりましたが、高校時代まで個人レッスンに通っていたほど、ピアノを弾くのも好きでした。教師になって最初に赴任した学校で吹奏楽部の顧問の一人となり、数年後、音楽専科の教師が異動されてしまったため、自分がメインの顧問となり吹奏楽部指導を始めました。

●マーチング・バンドを指導されようと思ったきっかけは？

大学時代に所属していた吹奏楽部の演奏会のプログラムとして、第１部はポップス、第２部はステージ・マーチング、第３部はクラシックなどで構成するのが当時、一般的だった時代がありました。前任校の演奏会でステージ・ドリルをすることがあって、そこでマーチングの魅力を確信したのです。音楽に加えて視覚的な要素や動きといった部分ですね。

●しかし、すぐにマーチングバンドを立ち上げたわけではなかったとか…。

本校に赴任したとき、吹奏楽部の部員は３人。初めはマーチングを始めるつもりはありませんでした。とにかく吹奏楽部を指導するのは大変なことだと、前任校で痛感していましたから…。しかしその一方で、困ったことにマーチングの華やかなパフォーマンスも頭から離れないのです。結局、自分のそ

「先生、夢を語られるのも結構ですが、
その前に部員の数を増やしてください」
と笑われました。

の頃の年齢を考え、「始めるならこのタイミングしかない！」と決断しました。

●どのような思いでスタートされたのでしょうか？

吹奏楽部の顧問となってからも、私なりの考えで３年間はほとんど何もしませんでした。とにかく白紙の状態からマーチング・バンドを立ち上げたかったのです。部活指導での「こうするとうまくいかない」ことを排除して、「こうすればうまくいくかも…」というノウハウを実践してみたかったこともその理由でした。時が過ぎ、「マーチング・バンドとして活動します！」という呼びかけに、12人の生徒が集まりました。

●最初に取り組まれたことは？

マーチングで使用する特殊な楽器を集めることから始めました。特に打楽器がないと話にならないのです。幸い、その当時は国体開催などの関係で、近隣校にマーチング用の楽器が整備されていました。国体が終わると、日常的に使用していない学校があることを知り、「眠っている楽器があれば提供してください」と、自らの足で情報収集しました。

●まず、環境を整備されたのですね。

楽器をそろえるという条件をクリアし、活動開始の準備が整いつつありました。私は白紙の状態からの大きな前進に満足し、部活の保護者会で「ゆくゆくは全国大会に出場してがんばります」と大見得を切ってしまったのです。親御さんからは「先生、夢を語られるのも結構ですが、その前に部員の数を増やしてください」と笑われました。

●部員にはどのようなトレーニングをされたのでしょうか？

12人の生徒たちには、徹底的に基本練習をさせました。経験者はいませんでしたから。練習後は毎日ミーティング。手間をかけ、私はマーチングの歴史や背景について、彼ら一人一人の目を見ながら熱く語りました。人数が少ないので話しやすかったですね。

●創立時のメンバーは「伝説の１２人」と呼ばれているそうですね。

新しく立ち上げたマーチング・バンドは、この12人を核にして発展させていくしかないと確信していたので、彼らが卒業したあとにチームのスタイルが変わらないように、チームの名前、ユニフォーム、規則などすべてのことを、このときのわずかな期間で決めてしまいました。彼らはOBとして、きちんとバックアップしてくれました。

●部活を軌道にのせるために、どのようなご苦労があったのでしょうか？

さきほどの楽器のことだけでなく、地域からの協力や交流も大切だと考え、積極的に活動をアピールしていきました。まだ部員数が少ない頃からです。マーチングでは広い練習場所が必要です。校外で練習する機会が増えたときにもあらかじめ地域の理解を得ていたため、活動がしやすくなりました。

●コンクールで実績を上げ始めることができたのは…？

昔は、生徒にモチベーションと技術があれば部活はうまくいくと思っていました。でも、そうではないのです。チームが一糸乱れず体を動かすためには、日常の生活に基礎を置かなければだめだと実感しました。どれだけ生徒たちの意識を改革できるか、ということなのです。

●マーチング・バンドの指導で大切にされていることは？

楽器の奏法は学習することができますが、マーチングでは「歩き方」も変えなければなりません。「歩き方」は学習することでしょうか？いつもダラダラしている生徒が、部活のときだけ変身することはないのです。そこから、規律ある生活をすることが大きな課題だという視点が生まれました。極端に言えば、技術を教えるのは簡単です。心を教えるほうがはるかに難しいのです。

また、生徒たちの情熱も大切にしたいと思っています。彼らはコンクールで金賞の頂点に立つグランプリを獲得したいのです。「全国大会金賞」では、帰りのバスの中は静まりかえっていました。彼らの主体的な取り組みに応えることが、今の自分の生きがいといった感じですね。

4 ダンス部

**平成24年4月から、中学校の保健体育では武道とともにダンスが必修化されました。
バロック時代の舞踊から、昨今人気のストリートダンスに至るまで、
ダンスと音楽は切り離すことのできない関係です。
そこで、教師と生徒が一丸となって活動しているダンス部を訪ね、
その顧問であり、保健体育を担当されている原 和香先生にお話を伺いました。
創作ダンスに音楽はどのような関わりをもつものでしょうか?**

東京都立山崎高等学校主幹教諭
原 和香（はら・わか）

●創作ダンスの特徴とは？

創作ダンスは、ロックやサンバなどのリズムダンスと違って「音楽に合わせて踊る」ものではありません。まず、「表現したいテーマ」を決めることから始まります。テーマが決まると、そのテーマに合うイメージの音楽を探して選びます。そして、その音楽をバックに流しながら、自由に体で表現し、一つの舞踊作品をつくっていきます。

●テーマとは具体的に言うと…？

例えば「海」や「風」でもいいし、昨年本校では、「心の詩（うた）」というタイトルで生徒たちのこれまでの心の成長をテーマとして、コンクールに参加しました。体育祭の２学年女子全員のダンス発表では、修学旅行で訪れる「沖縄」や「神戸」、「広島」などの地域について調べ、心に響いた内容をテーマにします。また今年のコンクールでは、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』から感じたことをイメージして踊る予定ですので、この作品から感じ取ったイメージと合うような音楽を探しています。

●音楽はどのように選びますか？

インターネットでキーワードを入力して検索したり、図書館やCDレンタル店を利用したりして、毎回200～300曲の音楽を聴いて、その中から選びます。もちろん私も含め部員全員で行います。歌詞があるものより、インストゥルメンタルなものになりがちですね。ほんとうは、演技時間内に収まるタイムで、起承転結のある音楽が理想なのですが、なかなかそういう曲は

音楽にシンクロしながらも、あくまで全体を通じて「テーマ」を体で表現することが目的なのです。

見つかりません。コンクールでは音楽のセンスも問われますし、身体表現を導き支える重要なものですから、選曲にはとても神経を使います。

●どのように作品をつくっていくのですか？

私は、日常のトレーニングの基礎・基本となるストレッチや柔軟体操、ステップ、技などを織り込んで、作品の中で生かすようにしています。バレエやジャズダンスのような「型」がないかわり、体で表現できる幅は広いといえます。独創性は重要ですが、個々の演技は基礎・基本の積み重ねによるものです。作品は私が構成し、直接生徒に示しながら、試行錯誤を経て仕上げていきます。

●創作ダンスと音楽の関わりについて

音楽がレガートに奏でられていても、激しく体を動かす場合がありますし、逆に音楽が速く力強い部分でも、緩やかに身体表現をすることもあります。つまり、決して音楽に合わせた「振り付け」ではないということです。音楽にシンクロしながらも、あくまで全体を通じて「テーマ」を体で表現することが目的なのです。

●生徒のリズム感に個人差はありますか？

ダンス部に入部してくる生徒には大きな差を感じませんが、授業全体でみると、かなりあるかもしれません。細かいリズムを感じ取れるか、動けるかという部分です。スキップができない生徒もいますから。こうした側面は、生活の中でどのように音楽を聴いてきたかということと関係が深いのかもしれませんね。

●ダンスを指導されていて、「民族性」をお感じになることはありますか？いわゆる「日本的な感性」というような…。

私たち日本人は、ともすれば表現が「小ぶり」になりがちです。もちろん私個人の印象ですが…。ダイナミックさが足りないと、いつも感じます。「恥ずかしい」という心理が、他の民族に比べると強く働くことと関係しているのかもしれません。その反面、繊細な動きや奥行きのある表現という点ではとても優れていると思っています。

●生徒たちの取り組みから感じられることは？

ダンスというと体の動きばかりに意識が向きがちですが、実は表情もとても大事なのです。「顔は心の鏡」であることを感じます。しかし、表情は表現したい内容がしっかり心に無いと絶対につくれません。文化祭などでダンス部がパフォーマンスをするとき、多くの生徒が熱心に鑑賞してくれるのは、きっと全身全霊をこめて踊って表現する姿に、応援や共感の気持ちをもってくれるからだと思います。

●リズム感の育成について、音楽科の教師にご要望はありますか？

そんな大それたことは考えもしませんでした（笑）。やはり、いろいろな音楽をたくさん聴かせてほしい、ということでしょうか。創作ダンスは、とにかく作品のテーマを考えることが重要ですので、生徒が日頃から何に関心をもち、どう感じているかということがとても影響します。そう考えると、運動や音楽だけでなく、学習全体が大きく関わって表現を支えていると捉えることもできるのです。

5 音楽に関する部活動を数多く実践している学校

**最後にご紹介するのは、中高一貫教育における部活動の実践です。
田園調布学園では、中等部と高等部の生徒たちが合同で部活動に取り組みます。
音楽に関係するものが多く、中でも「ミュージカル研究部」は、
他にあまり例を見ないユニークな部活動ともいえます。
音楽専科として、授業だけではなく6学年にわたる生徒たちの部活動の推進に
力を注がれている黒井晴子先生にお話を伺いました。**

田園調布学園 中等部・高等部教諭
黒井晴子（くろい・はるこ）

●音楽に関係する部活動が多いですね。

音楽部、ミュージカル研究部、軽音楽部、管弦楽部の４つが活動しています。私が顧問を務めるのは音楽部と管弦楽部ですが、実際に音楽の指導に当たるというよりも、コーチやインストラクターの調整をしたり、楽器の管理をしたりすることが主な役目となっています。

●管弦楽部は部員数が多いとお聞きしました。

100名近い人数がいます。トランペットなど、まだ担当する部員のいないパートも一部ありますが、基本的にはオーケストラです。弦楽器を希望する生徒が多いのは、中等部の音楽科の授業で弦楽器を扱っていることと関係しているのかもしれません。

●授業で弦楽器を扱うのですか？

本校の中等部では、音楽の授業でヴァイオリン、チェロ、コントラバスといった弦楽器を全員に体験させ、中学３年で簡単な弦楽アンサンブルに挑戦します。授業で学習していることも関係しているでしょうが、新入生歓迎会での発表が入部への意欲を高めているように感じます。管弦楽部の希望者も最初は10名程度でしたが、年々増えてきています。

●管弦楽部は黒井先生が立ち上げられたのですか？

いいえ、生徒からの要望で設立しました。管弦楽部に関しては、授業で学習する弦楽器を「もっと弾きたい」「アンサンブルしてみたい」という気持ちが育っていったのだと思います。

中等部の１年生にとって、高等部の２年生などはもうほとんど大人と同じです。

●指導する際にご苦労された点はどのようなことでしょうか？

やはり先輩となる生徒を育てるまでが大変でしたね。人数が増えてからは、ソロやオーケストラで活躍されている方にコーチをお願いしてボランティアに近い条件で来ていただいていますが、それまでは私が直接指導していました。「みんなが上手になって、部員ももっとおおぜいになったら、こんな曲も演奏できるね」などと、生徒たちと夢を語り合ったことをよく覚えています。

●部活動の中で、中高一貫校ならではの特徴はありますか？

先輩・後輩の幅が広いという点が強みでしょうね。中等部の１年生にとって、高等部の２年生などはもうほとんど大人と同じです。音楽関係の部活動に限らず、先輩から学び、生徒どうしが高め合う活動が機能していくと、とても大きな力になります。運営についても、生徒たちが主体的に取り組んでいるところがほとんどです。

●話題は変わりますが、ミュージカル研究部と銘打った部活動は、珍しいのではないでしょうか？

こちらも生徒たちからの要望で生まれました。本校には合唱部がなく、音楽部でヴォーカルアンサンブルなどを行っているのですが、ミュージカル研究部も歌うことが好きな生徒たちで構成されているのが特徴です。発声の指導を音楽科の講師が務めており、日頃から基礎的な練習を心がけて活動しているようです。有名なミュージカルのダイジェストやハイライト部分を表現するのが主な活動内容で、実際の舞台や映像をもとに、高等部の生徒が振り付けを研究し、考案しています。

●取材していて、生徒たちがいきいきと活動している様子が伝わってきました。

本校には「演劇部」もあり、人気を集めています。同じ演劇的要素がありながら、あえて「ミュージカル」を選んだのは、「歌うこと」へのこだわりだと思っています。だからはっきり演劇部との境界線を意識し、歌って表現することに意欲を燃やすのでしょうね。

●コンクールといった対外的な目的のために部活動を行っているようには感じられませんでしたが…。

音楽関係の部活動の場合、そうかもしれません。発表の場は、新入生歓迎会、「なでしこ祭」と呼ばれる文化祭、地域のお祭りなどが主なものになります。生徒たちが目標を定め、達成感を味わう…。生徒たちはそんな部活動が楽しくてしょうがないようで、夢中になって取り組んでいます。授業では味わうことのできない活動を通して、連帯感が生まれ、それぞれが成長を遂げられるよう、指導者として支えていきたいと思っています。